

第 41 回五三会建築設計競技 「対峙する家-名住宅のとなりにすむ」 審査講評

私たちの生きる現代は、誰でも、世界中のどこからでも、好みのデザインや材料やスタイルを組み合わせ、それらを着たり、食べたり、住んだりすることができる、それまでのどの時代にもない自由を持った社会です。しかしながら、現代の我々の社会が持っている最大の美德であるこの選択の自由は、建築の世界では、まとまりのない醜悪な景観という形で都市に現れ、大きな批判の対象となります。不思議な事に、古い時代に限られた権力者によって制限され強制されて作られた都市を、調和の取れた美しい景観として評価することさえあります。誰もが現代の自由を謳歌した生活を送りながら、その結果生じる乱雑な都市景観にこれではいけないと思っています。かといってヨーロッパの歴史的な街並みのような統一をいまさら強制する事に意味がないことも分かっています。問題を簡略化して1対1の2つの建築の関係だけで考えてみてはどうでしょうか。数十年前に建築の最大の自由を求めて名作をつくった巨匠達がありました。一方で、現代にそれと同じく新しい時代の最大の自由を求める建築家の卵がいるとします。お互い尊重し合う関係となったときに、新たな街並みの最初の第一歩が見出せるのでしょうか。互いに制限したり、強制しあったりすること無しに、現代的な自由を最大限に活かしながら、何らかの調和を見出すことが出来るのかという問いがこのコンペの原点となっています。簡単に解答が出る問題ではないですが、考え続ける価値のある問いだと思います。

一等案の「となりのいえ」がまず素晴らしかった点は、「塔の家」の置かれている周辺状況を的確に模型で表現していることでした。その事によって、「塔の家」と新たに提案された「となりのいえ」の周辺環境への対照的なふるまいが、そのままコンセプトとして分かりやすく理解されます。周辺環境に迎合しない自立性の強い造形に対して、となりの建物に寄生するような存在の仕方、50年近くその場に立ち続けてきた強さと、常に仮設的で変化を繰り返していくやわらかさ、限られた開口による濃密な内部空間に対して、生活が都市にあっけらかんと露出された開放感。対比的であるがゆえに双方の魅力が引き立つ、素晴らしい提案です。しかし、審査の過程では、あまりに今風にオープンで、コンペ受けしそうな明快さが気になり、女性の設計者本人が住むリアリティを持っているのか、本当にこの家に住みたいと思っているのかを聞いてみました。答えは真剣そのもので、模型やドローイングに丁寧に示された生活の断片は、適切なスケール感の中に説得力があり、何よりも私自身この過剰に過密で埃っぽい町が嘘のように楽しい場所としてイメージを喚起されたので、この案を高く評価することにしました。

二等案の「路地に住まう」は1等案と同じく、まずは「塔の家」をきちんとしたスケールで丁寧につくっていたこと、その「塔の家」と周辺の都市のありようを模型によってきちんと説明したことがとても重要でした。1等案が対比的な関係を構築したものであったとすれば「路地に住まう」提案は、比較的「塔の家」と都市との距離感を参照しながらつくられているように思いました。1等案が幹線道路に面して敷地を選定したのに対して、彼らは「塔の家」よりもまた少し奥まった場所をあえて選択したことが、作り出す空間の密度感に繊細に反映されていました。内部空間を路地と生活空間に明確に分割するコンセプト模型は空間構成を分かりやすく説明するために必要だったのだと思いますが、むしろそれが部屋名の付けやすい機能空間と光や動線がうつろう抽象的な路地空間を分割しすぎていて、双方が窮屈に感じられた事が残念でした。限られた寸法の中で、人の動き、用途、光、音、視線のつながりなどが、渾然一体となって解決されている「塔の家」を、より注意深く観察することでもっと緊張感のある豊かな空間を生み出すことが出来るのではないかと思います。

三等案の選んだ「松川ボックス」はそれ自身3棟の集合体であり、さらに数年後に増築されているので、すでに宮脇壇さんがこのコンペの解答を示してくれているようなものです。「まちが共有する個の住空間」と題された三等案では、「松川ボックス」の中庭や、周囲の建物との隙間空間とうまく連続するように、生き生きとした中間領域がつけられており、すぐにも建設して住んでみたいリアリティを感じました。審査の過程では、門型ストライプフレームについて「要らないのでは？」と少々意地悪な質問をしましたが、その問いかけは自分自身が設計中に幾度となく自問する事でもあります。「要らないのでは？」と考えることは、それが存在する根本的な理由を問うことだからです。門型フレームがあるのであれば、その内側の生活機能を納めたボックスはもっと華奢で、構築性の低いものであった方が、内外のグラデーションに連続感が生まれ、外のストライプフレームと中のボックスの役割分担が明確になるのではないかと思います。あるいは、門型フレームというシンボリックな造形なしに、都市の中に中間領域をさりげなく発見することが出来れば、より洗練された建築になると思います。

賞を授与した3チーム以外にも素晴らしい提案は幾つもありました。審査会当日に初めて提出された全18模型を見たときには、一つ一つの提案をじっくり心行くまで楽しく鑑賞してそのまま家に帰ることが出来れば、どれほど楽しい一日になるかと考えたほどで、丁寧に情熱を込めてつくられた模型の中から、受賞作を選ぶ責任を一人で負うことがこれほど大変なことだとはその時まで思いもしませんでした。このような充実したコンペになったのは、模型提出だけでコンペをやりたいと言いつつ私のががまを實現して下さった五三会和総合資格学院の皆様の努力と配慮の賜物と思いますし、このような機会を与えて下さったことに心からお礼を申し上げます。また、このコンペでは対峙する名作住宅の資料が十分にあり、それを観察するプロセスがあったことが、コンペが抽象的なアイデア勝負に陥らず、スケールや体験を伴った生き生きとした提案の集合になったのだと思います。この度のコンペにご協力いただいた広島市現代美術館にもこの場をお借りしてお礼申し上げます。最後に模型を提出してくれた18チームの皆さんありがとうございました。このコンペ案で提案した事を近い将来實現する建築家が現れることを願っています。

土井一秀